

「無色」の表現と「色付き」の表現をめぐる随想

中村雅之

1. 「ドイツ語を話す」と「ドイツ語で話す」

下宮忠雄『ドイツ語語源小辞典』(同学社1992)の「Deutsch」の項には次のような記述がある。

er spricht Deutsch「彼はドイツ語を話す」は本来 er spricht deutsch「彼はドイツ語で話す」の意味である。ラテン語では Latīnē loquitur「彼はラテン語で話す」Rōmānicē loquitur「ローマふう(ローマの言葉で)話す」、ロシア語では on govorit po-rússki「彼はロシア語で(ロシア語式に)話す」という。

つまり、「Er spricht Deutsch.」における「Deutsch」は、現在では通常大文字で書き始められ、名詞扱いであるが、本来は「ドイツ語で」という副詞であったという説明である。ラテン語の表現に見るように、「～語で話す」という表現形式が印欧語の本来の姿なのであろう。その際、「～語で」を表す専用の副詞が用意されていたようである。ロシア語の表現では、専用の副詞はないが、「～で」を意味する前置詞「po」(いまローマ字転写で示す)と「ロシア語」という名詞の組み合わせで「ロシア語で」という副詞句をなしている。

現代ドイツ語においても、例えば手元の1992年版『クラウン独和辞典』などでは、「sprechen」の自動詞の項に「englisch (mit englischem Akzent)～英語(英語なまり)でしゃべる」という例があるし、「deutsch」の項には「～ sprechen (schreiben)ドイツ語で話す(書く)」という例があるから、言語を表す形容詞をそのまま副詞的に用いることはある。というよりも、現在それを大文字で書き始めることになったのは、単にドイツ語話者の意識が「～語を話す」式の(言語名を目的語とみなす)表現に傾いていることの表れに過ぎず、構造的に見れば、「Er spricht Deutsch.」の「Deutsch」は今でも副詞だと言うべきかも知れない。

実は上述の『クラウン独和辞典』には、「sprechen」の他動詞の項に「gut (fließend) Deutsch～ドイツ語がうまい(ぺらぺらである)」という例文もある。ここでの「Deutsch」は名詞である。同辞典の解釈では、「deutsch sprechen」の「deutsch」は副詞で、「gut Deutsch sprechen」の「Deutsch」は名詞ということになる。「gut(上手に)」という副詞があると、「deutsch」が名詞に解釈されるのはなぜであろう

か。

フランス語にも類似の現象がある。「Elle parles français.(彼女はフランス語を話す)」に対して、「Elle parles bien le français.(彼女はフランス語を上手に話す)」という。「bien(上手に)」という副詞が付くと、「français」にしばしば定冠詞が付くのである。なお、この場合の「français」は常に名詞であり、副詞として「フランス語で」と解釈されることは少なくとも現代ではない。しかしフランス語が俗ラテン語から発達した言語である以上、この「français」がもともとは副詞であったことは容易に想像できる。ところが「bien」が付くと、定冠詞を付して名詞であることが明示されるのである。ドイツ語の例と平行する関係と言えよう。

フランス語の参考書などによくある説明は、外国人の話すフランス語を意図する場合に定冠詞が付く、というものである。「上手に」話すことを問題にするのは非ネイティブの場合であって、フランス語話者に対して「上手に話す」と表現する必要はない。したがって、「bien」のような副詞を伴うのは、外国人が主語になる場合のみであり、それゆえ定冠詞を付して「le français」と表現されるということらしい。

このような説明の是非はさておき、本質的なことは、形容詞(の副詞的用法)を用いた「～語で話す」式の表現は、フランス語においてもドイツ語においても、印欧語本来の最も自然な、特別なニュアンスを伴わない無色の表現だということである。したがって、「Elle parles français.(彼女はフランス語を話す)」と言えば、それは、彼女がフランス語をごく自然に話すことを意味する。それに対して、言語を名詞形で用いる「Elle parles bien le français.(彼女はフランス語を上手に話す)」式の表現は、特殊なニュアンスを含んだ表現、この場合であれば、外国人が学習したフランス語などを含意する表現である。ドイツ語においても同様のニュアンスがあるために、上述の辞書のような記述になるのであろう。

## 2. 類例(らしきもの)

上に述べたような、日本語では区別されない、「特殊なニュアンスを伴わない表現」と「何かしらのニュアンスを伴う表現」の対立は、実際には多くの言語に様々な場面で見られる。無色の表現と色付きの表現と言ってもよいし、意味論的な意味で「無標」と「有標」と言ってもよいかも知れない。

英語で「私は日本人です」は通常「I am Japanese.」だが、強調的な表現として「I am a Japanese.」もある。前者の「Japanese」は形容詞、後者は名詞である。後

者は国籍を強調するなどのニュアンスを伴う。このような形容詞と名詞の使い分けは、上述のドイツ語やフランス語の例に通じるものがある。ただし、「They are Japanese.」のように複数形になると、名詞としての「Japanese」が単複同形であるため、形容詞との区別が付かなくなる。

朝鮮語で「これは何ですか」は「i-ges-i mu-es-ip-ni-gga(これが何ですか)」が中立的な表現で、「i-ges-yn mu-es-ip-ni-gga(これは何ですか)」は対比・強調のニュアンスを伴うとされる。朝鮮語と極めてよく似た文法構造を持つ日本語には、この区別はない。

中国語で「彼は泳げる」は「他会游泳」だが、「彼は100メートル泳げる」は「他能游100米」となり、助動詞が「会」から「能」に変わる。これは中国語の初学者を悩ませる区別であるが、要するに「会」は特殊なニュアンスなしに、自然にある行為をなし得ることを言い、「能」は個別な条件を問題にする。

日本語ではどうかと言えば、日本語にはおそらくこのような対立はほとんどないと思われる。それはそもそも日本語に「中立的な」(つまり無色の)表現が極端に少ないからである。例えば、英語の「give」にあたる日本語は「あげる」「あたえる」「やる」「くれる」「さしあげる」など著しく細分化されており、それぞれに色が付いている。「give = 与える」という図式は一定の教育の場でしか通用しない。

上に見たような、各言語における意味的な無標と有標の対立は、実は、多くの言語では無標の(無色の)表現が中核をなし、時として有標の(色付きの)表現との対立を持つことがあるということなのではあるまいか。それに対して日本語では個別的な表現が圧倒的な優勢を占め、無色透明な(あるいは中立的な)表現が非常に少ない。日本語とよく似た文法体系を持っている朝鮮語も、日本語に比べれば、有標的な表現の割合は少ない。朝鮮語は日本語の「ある」と「いる」の区別を持たないし、敬語法においても謙譲語を持たない。英語の「Do you want to come with us ?」や中国語の「他很高兴」を直訳しても自然な日本語にならないのは、「～したい」や「うれしい」という心理表現が日本語においては中立的な表現として機能しないことが大きな要因である。

日本語において、唯一確実な無標の表現は真に(=音韻論的に)無標にすること、つまり「何も言わない」ことである。一人称代名詞は「わたし」「ぼく」「おれ」など、何を使っても何らかの色彩を伴うが、「中村です」のように何も言わなければ、それが最も中立的な表現となる。日本語において省略法が発達している理由もそのあたりにあるのだろう。